

近世建築の彫刻にみる遊戯 ―日光東照宮と歎喜院聖天堂を事例として―

山崎有生*

*奈良文化財研究所 文化遺産部

* yamazaki-y5g@nich.go.jp

概要：安土桃山時代以降、建築彫刻は急速な発展をし、多様な題材が用いられるようになったことはよく知られている。しかし、その建築彫刻の題材の具体的内容がどのようなものであるかや、時代によってどのように変遷しているかについては、あまり関心が払われていない。よって本稿では、「遊戯」の彫刻に注目し、近世前期の事例である日光東照宮と中期の歎喜院聖天堂を比較する。まず、前者に対し、後者の方が「遊戯」の彫刻が圧倒的に多くなっている事実を確認する。ついで、歎喜院聖天堂の彫刻の「見られ方」に注目して「遊戯」の彫刻が多く用いられた背景について若干の考察を行う。

キーワード：近世建築, 日光東照宮, 歎喜院聖天堂

1. はじめに

全国に8万～11万社あるとされる神社は、神々を祀るための本殿、礼拝をおこなう拝殿などをはじめとする各種の社殿によって構成される。社殿の形状には様々な形式の分類があるが、中世の後期から近世にかけて、構造が複雑に変化した上に彫刻などの細部の装飾が多くなる傾向にある。特に建築彫刻が著名な事例として、栃木県日光市山内に所在し、東照大権現(徳川家康の神霊)を祭る日光東照宮が挙げられる。同社は多数の国宝・重要文化財建造物を擁するが、本殿・石の間・拝殿はいわゆる権現造¹の社殿の中で最高峰の建築と評される²。一方、日光東照宮と同じ形式の社殿を持つ神社建築として、埼玉県熊谷市妻沼に所在し、大聖歎喜天を祀る歎喜院聖天堂が挙げられる。両者の建築形式は類似するがその建築彫刻は大幅に異なっている。

よって、本報告ではまず、日光東照宮と歎喜院聖天堂の建築彫刻を比較し、両者の違いを抽出する。すなわち、後者の方が「遊戯」の彫刻が圧倒的に多くなっている事実を確認する。ついで、歎喜院聖天堂の建立の経緯と彫刻の「見られ方」に注目して「遊戯」の彫刻が多く用いられた背景について若干の考察を行う。廻廊まわりを中心に、本社(本殿)の社殿配置の成立過程とその背景を明らかにすること目的とする。

2. 日光東照宮と歎喜院聖天堂の比較

日光東照宮は寛永13年(1636)再建された。本殿の腰羽目には草花の彫刻、大羽目には獅子の絵を入れる。その中には、遊戯に関する彫刻は見受けられない。対して、歎喜院聖天堂は享保20年(1735)に着工し、拝殿を含めた全体が完成したのは宝暦10年(1760)のことである。奥殿の腰羽目には竹馬・小間取・闘鶏・風揚げ・砂取り・盆踊り・獅子舞・雪遊び・相撲、大羽目には唐子遊び・囲碁・双六等の彫刻を入れる。日光東照宮が歎喜院聖天堂に対して遊戯の彫刻が少ないことは明らかである。

¹ 本殿と拝殿を石の間に連結した社殿形式のこと、その平面形状は「工」の字状を呈す。

² 大河直躬, 1981, 「概説」『日本建築史基礎資料集成三 社殿Ⅲ』, pp.3-12.



図 1 日光東照宮本殿東面



図 2 歎喜院聖天堂奥殿南面

3. 歎喜院聖天堂の建築彫刻

では、歎喜院聖天堂奥殿の遊戯の彫刻はどういった背景に起因するものなのだろうか。ここで延享2年(1745)刊行の絵手本の一種、『絵本直指宝』に着目したい。そこには、囲碁・双六・鬪鶏・小間取り・竹馬・雪遊びといった遊戯が絵(彫刻)の手本として流通していたと推測される。一方で、凧揚げ・砂取り・盆踊り・獅子舞・相撲は歎喜院聖天堂奥殿独自の物である。



図 3 歎喜院聖天堂奥殿西面中大羽目彫刻



図 4 絵本直指宝



図 5 歓喜院聖天堂奥殿西面中大羽目彫刻



図 6 絵本直指宝



図 7 歓喜院聖天堂奥殿縁下腰羽目彫刻 相撲

4. おわりに

歓喜院聖天堂奥殿の彫刻には日光東照宮本殿にはみられない遊戯の彫刻が増えていることが分かった。また、前者の彫刻に絵画の手習書『絵本直指宝』に典拠となる図像が見いだせることがわかった。しかしながら、凧揚げ・砂取り・盆踊り・獅子舞・相撲といった図像は『絵本直指宝』に典拠が見いだせない。これらのことから、民衆の勧進によって建てられた歓喜院聖天堂奥殿の彫刻は、一般に発刊された『絵本直指宝』の影響に加え、当時主要であった遊戯を独自に盛り込んだ可能性が想定できるのではないだろうか。

参考文献

- [1] 太田博太郎編, 1981, 『日本建築史基礎資料集成三 社殿Ⅲ』中央公論美術出版
- [2] 絵手本 DB <https://www.kanazawa-bidai.ac.jp/edehon-db/quick.cgi?mode=result&id=78>